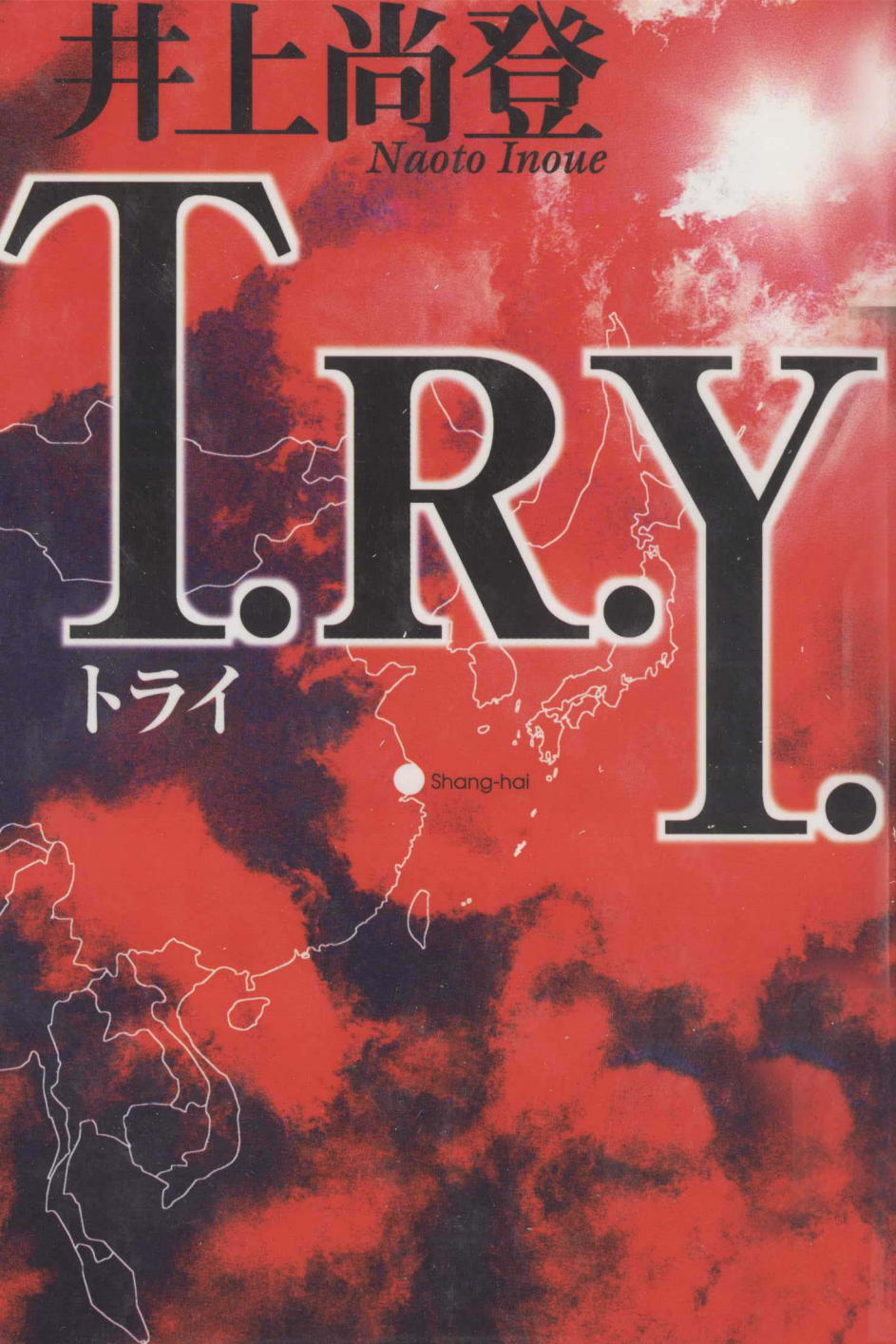
井上尚登

Naoto Inoue

T.R.Y.

トライ



井上尚登

Naoto Inoue

T.R.Y.

トライ

江苏工业学院图书馆
藏书章

角川書店

T・R・Y・トライ

平成十一年七月三十日　初版発行

著　者――井上尚登
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三
〒一〇二-八一七七
振替〇〇一三〇-九-一九五二〇八
電話／営業部〇三-三二三八-八五二一
編集部〇三-三二三八-八四五一

装　幀――角川書店装丁室
印刷所――暁印刷
製本所――株式会社コオトブックライン
落丁・乱丁本は小社営業部受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Naoto Inoue 1999. Printed in Japan
ISBN 4-04-873179-3　C0093

T.
R.
Y.

主な登場人物

伊沢修……詐欺師
関虎飛（グァンフェイ）……中国革命同盟会幹部
パク・チャン・イク……詐欺師・伊沢の仲間
陳思平（チェンスピン）……青幇（チンパン）・伊沢の仲間
愛鈴（アイリーン）……中国革命同盟会員
麗華（リファ）……愛鈴の妹
キム・ヨル……赤眉の暗殺者
東正信……陸軍参謀本部参謀次長
石原伊織……第一師団長・東と陸相の椅子を争う
明石元二郎……韓国駐箚憲兵隊司令官
田中義一……歩兵第二旅団長・明石の盟友
愛新覚羅溥沢（アイシンギョロ・プーツー）……清朝皇族・陸軍士官学校留学生
神崎重之介……警視庁高等課刑事
椿幸四郎……子爵・東京愛犬倶楽部主宰
山名順平……壮士
全老人（チョン）……伊沢のかつての仲間・仕込み屋
蔣士清（ジャンシチン）……上海のチンピラ
江敬秀（ジャンジンシュー）……横浜中国人街のピアノ弾き
喜春……新橋芸者屋のおかみ
武丸……喜春の飼っている秋田犬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プロローグ

そりゃあ、苦労はしましたよ。あれは、明治の三十三年だったかしら。パリの万国博覧会で芸者をみせたいって話がありましてね。ところが、誰も行こうとはいいださないんです。情けないったらありゃしない。このままでは新橋芸者の名がすたっちまう。それじゃあ、あたしがってんで、うちの若い芸者を引き連れて万国博覧会に行ったわけなんです。

その万国博覧会が終わって、さあ、日本へ帰ろうとおもったら、欧州に残れって、フランスの人がいうんですよ。芸者は日本の文化だ、素晴らしい。是非、いろいろな国の人に知ってもらった方がいいってね。そうまでいわれちゃ、あたしだって江戸っ子ですから、「よござんす」ってなもんですよ。

ところが、困ったことに言葉がわからない。万国博覧会のときは、よかったんです。ちゃんと日本人の通訳もいましたしね。でも、欧州を巡るのは、お国の仕事じゃないって、通訳の人も日本に帰っちゃって。冷たいじゃありませんか。こっちは、日本の文化のために一肌、脱ごうってのに。あなたも、そうおもうでしょ。

でもね、行く先々で大評判でしたね。きれいな芸者が、きれいな着物を着て、踊りや歌をみせるんですから。あたしも、うれしかったですよ。ところが、悪い奴もいるんです。ドイツで興行主があたしたちのお金をもって逃げちゃってね。あんときはまいりました。

ところが、捨てる神あれば、拾う神あり。日本人の若い男がね、助けてくれたんです。持ち逃げした興行主を探し出して、お金を取り戻してくれたの。

えっ、どんな男かって？

イザワシュウ。伊豆の伊に、丹沢の沢。それに修善寺の修。オサムじゃないですよ。シュウって本人はいってました。それ以来、修ちゃんとは仲良くなって、日本に修ちゃんが来たときは、うちへ泊めたんですよ。

いやですよ、その頃はあたしはもう六十を越えてましたから、そんな浮いた関係じゃありません。私の子供みたいなものですって。でも、修ちゃんが連れてきた人たちはみんな個性的でしたね。中国の革命家なんてのもいました。えっ、修ちゃんがなにをしている男かって？

それはねえ。ちょいとばっかり差し障りもあるんですよ。ですから、修ちゃんのことは勘弁してくださいな。

月刊誌「日本婦人」大正十二年五月号「新橋芸者、欧州を行く」より

日露戦争で明石元二郎大佐がはたした役割は大きい。彼がヨーロッパで行った反ロシア工作には多くの現地人、そして、ヨーロッパにいた日本人が関わっている。多くはヨーロッパに赴任した商社員であったが、中には身元不明のものもいる。

明石元二郎大佐は几帳面な性格で、反ロシア工作にかかった金をきちんと帳簿につけていた。そのなかに度々、伊沢修という名前が登場する。明石は彼を通じて武器を購入したり、ヨーロッパの反ロシア勢力に活動資金を渡したりしていたのだ。伊沢修が何者なのかは、現在もわかっていない。

「明石工作の真実」猪股征四郎著　昭和三十一年刊

椿幸四郎子爵は博愛主義の人であった。恵まれない人々のために多くの私財を投じている。それは日本だけにとどまらない。中国の上海郊外に連春という小さな村がある。そこの小学校の碑には、椿幸四郎子爵の名が刻まれている。

子爵が明治四十二年に上海を訪れたとき、日本支那友好協会の理事、伊沢修氏に依頼され、その村に小学校を作る資金を寄付したことがある。この碑は、そのことに感謝してのものであった。

「明治・大正のダンディズム、椿幸四郎伝」椿財団編　昭和三十五年刊

明治四十四年（一九一一）十月。中国において辛亥革命がおきた。

中国の革命に力を尽くした日本人の数は少なくない。

多くはその後、大陸浪人となって日本軍と結びつき、いままでとは逆に、中国大陸を侵食することになる。しかし、もちろん、例外もいる。

革命直後、上海で大規模な詐欺事件がおこった。革命軍が占領した紫禁城から大量の宝物が流出し、それを共同租界の英米人たちが購入したのだが、すべて贋物だった。その贋物を売りつけた詐欺師イーツーシュウは、詐欺で得た金をすべて革命指導部にわたしたという噂がある。イーツーシュウという男については、詳しいことはわかっていない。

おもしろいことに、この人物にはもうひとつの噂があった。

彼は中国人ではなく、日本人だというのだ。

イーツーシュウ。
漢字で書くと「伊沢修」となる。
実はこの名前は、明治三十年代から明治の終わりまでのあいだに、いくつかの資料に登場するのだ。あるときは、ヨーロッパで新橋芸者の一行を助けた者として、また日露戦争で対ロシア工作を行った明石元二郎の工作員としても、伊沢修の名前が見受けられる。さらに日本支那友好協会の理事としてもその名が残っている。ただし、日本支那友好協会なる団体はどこにも存在はしてなかったのだが。
何人もの伊沢修がいる。
彼らが同一人物かどうかは不明である。

月刊誌「現代論評」昭和三十六年十一月号　「辛亥革命五十周年・その光と陰」

一

面会人が誰だか看守は教えてはくれなかった。

伊沢修が名前もわからない面会人に会おうと思ったのは、刑務所生活にいい加減、あきていたからだ。上海の共同租界を広げるための道路工事……強制労働と刑務所を往復するだけの毎日は単調すぎた。今がいったい、何年なのか、何月何日なのかすらすでに忘れてしまっている。看守に促されて房を出るとき、ようやく今年は西暦でいえば一九一一年の三月、明治四十四年、中国風にいえば辛亥の年であることを思い出した。刑務所の中に季節はなかった。今日が何日なのか、正確なところはわからない。

最初、かつての仲間が会いに来たのかとも思ったが、その可能性がないことに、すぐに気がついた。彼らも伊沢と同じように脛に傷を持つ身だ。面会にくれば、共同租界工部局の警察に目をつけられてしまう。そんな間抜けな真似をするはずがない。

ならば、誰だろうか？

看守に連れられ、監獄の長い廊下を歩いていくあいだに考えてみたが、心当たりはなかった。

「伊沢、面会だってな。女か？」

二十八号房の囚人が樫でつくられたドアの向こうから、声をかけてきた。

「女ならたっぷり匂いを服にしみこませてこい。あとで嗅いでやる」向かいの三十五号房の囚人がからかうように叫んだ。

「ああ、そうする。ズボンに匂いをこすりつけてくるから、あとでおれのケツを嗅いでくれ」

伊沢がおどけた調子でいうと、A号棟の囚人たちがどっと笑い声をあげた。いらだたしげに看守が、警棒で三十五号房のドアを激しくたたく。鈍く乾いた音が牢獄に反響した。とたんに囚人たちが静かになる。

「さっさと、歩け」

看守は伊沢の尻を警棒でつついて、さきを急がせた。

囚人たちを怒鳴るのが趣味という小太りの男だ。おまえら、脱走しようなんて耳垢ほどにも思うなよ。棺桶に入ってここから出ていくことになる、これが彼の口癖だった。本当かどうか、一度試してみようと思っているが、まだそういう機会には恵まれていない。

監獄の廊下に窓はなかった。昼間とは思えないほどの薄暗さだ。わずかなランプだけが石造りの廊下を照らしている。重い湿気を含んだ闇が伊沢にまとわりついた。すっかり馴染みになった、うとましさだ。この湿気は囚人たちにとって、もう一枚の皮膚のようなものになっている。

いくつかの重い樫の扉を抜けるたびに光りは増していった。相変わらず窓はないが、ランプの数が増えたためだ。

最後の扉が開かれると、伊沢は思わず顔をそむけ、目をつむった。自然の光りがその部屋にはあふれていた。

「元気かね、伊沢」

光りの中から声がした。やけに低い、唸るような声だった。

うっすらと目を開けると、光りを背に受け、ふかしたての饅頭のような影が見えた。そしてうんざりした。

網格子の向こうにいたのは、派手な中国服に太った身体を包みこんだ中年の男だった。名前は丁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秀明。三年前に会ったときよりも、さらに太っていた。相変わらず、金儲けに余念がないようだ。
「ようやくおまえに会えた。大変うれしい」伊沢の顔を見ると、丁は分厚い唇をつりあげて目を細めた。
「おれもだ。自分が騙した欲ぼけの間抜け面をみることほど、楽しいものはない」伊沢は網格子の前に立ち、丁を見下ろした。上からみると、以前よりも頭のてっぺんが薄くなっていた。
「監獄の中でも、そのへらず口は直らないらしい。元気そうで何よりだ」
「どういう風の吹きまわしだ。金儲けで忙しいはずだろう。まさか、おれに会いたいだけで、北京からここまで来たわけでもなかろうに」
「いや、おまえに会うためだけに来たのさ。ぜひ、報告したいことがある」
「ついに金の儲けすぎをとがめられて、牧師をくびになったのか」
「とんでもない。我が教会は清でいちばん布教に熱心だと、ロサンゼルスの本部からお褒めの言葉をいただいたばかりだ。先月は信者が二十人も増えたよ」
丁はますます顔をくしゃくしゃにさせた。満面に笑みが広がっている。
「実はついに鉄道の権利を買った。アメリカが北京近郊に敷く鉄道だ。安くはなかったが、おまえが私に売りつけた贋物の債券とちがって、今度は本物だ」
得意げに丁が胸をそらした。
「ひょっとして、あんたはおれが騙したことを恨んでいるのか」
意外だというような表情を伊沢はしてみせた。
「もちろんだ。あんなひどい仕打ちをされて、恨まない奴がいたら教えて欲しい」にこやかに丁がうなずいた。

「心外だな。おれはあんたのことを思って、余計な金をちょいとばかり拝借してやったのさ。牧師が金儲けに血道をあげていては、天国へはいけないだろう」
「神の道を説くためには、残念ながら資金が必要だ」
「牧師ならおれのことを恨むのはよくない。キリストの教えを思い出せ。右の頬を打たれたら、左の頬をさしだせだ」
「だから、おまえは私の娘をたぶらかしたのか？　私から金をまきあげただけではなく、可愛い娘まで……」
丁の顔から笑いが消えた。細い目の奥に氷のようなとがった光りが宿った。
「おれたちは少しだけ歴史の真理について語り合っただけだ」伊沢は網格子の前の粗末な椅子に浅く腰かけ、胸をそらした。
「どうも、私は子供運には恵まれなかったらしい。麗華の姉は学問をきわめたいと、日本の学校へ行ってしまった。わざわざ家庭教師まで頼んで英語を教えたというのに、イギリスやアメリカではなく、おまえらの国にだ。それっきり、一度も国へ帰ろうとしない。そして麗華は……」丁は言葉を切り、激しい目で伊沢をにらんだ。
「おまえが余計なことを吹き込んだおかげで、麗華がどうなったと思う。日本へ行き、革命同盟会へ入ってしまった。あのホラ吹きの孫文が主宰する結社だ。何が革命だ。何が滅満興漢だ」丁の声がだんだん甲高くなってきた。
「はん、清王朝が倒れるのはもう時間の問題だ。麗華が革命に走ったというのなら、未来を見る目があったということさ。あんたに似ず、賢くて優しい娘だ」伊沢はからかうようにいった。
「皇帝のことなど、どうでもいい。革命が起きるならそれもいいだろう。直隷の袁世凱がクーデター

を起こすならそれもいい。だが、麗華にはなんの関係もないことだ。おまえがつまらない考えを吹き込んだばかりに、麗華は革命に関わりあった」
「革命がどうなろうと、それは中国人の問題だろうが。もっとも、革命騒ぎのどさくさに紫禁城のお宝のひとつでも手に入るんなら興味はあるがね。まっ、もしおれが中国に生まれたなら、この国の指導者の無能ぶりにはうんざりするだろうな。既に西太后も李鴻章(リホンチャン)もいない。ついでにいえば、この国を変えようとした変法派の連中も今はいない。残っているのはガキの皇帝と間抜けな面をした役人だけだ。この国の未来よりも自分の懐を温かくすることの方が気になるやつらばかりだ。麗華じゃなくても革命のひとつでもしてやろうという気にはなる」
「ああ無能だ。どうしようもないほど、清王朝は腐っている。だから、麗華はあいつらを暗殺しようとした。爆弾でだ。くだらない仲間と共に、麗華は摂政の醇親王に爆弾を投げようとしたのだ。もちろん、今でも醇親王は元気だよ。かすり傷ひとつ負っていない」
丁は立ち上がり、両手で面会室の机を強くたたいた。
「いいか、おまえさえ無用なことを吹き込まなければ麗華はあんなことはしなかった。すべて、おまえのせいだ」
人差し指を伊沢に突きつけ、丁が叫んだ。
時が止まった。
言葉が出なかった。麗華が爆弾を……。醇親王は四歳の皇帝溥儀(プーイー)の父親である。
だとしたら、責任の一端は間違いなく伊沢にある。
面会に立ち会っている看守が丁を見据え、人差し指を唇に押し当てた。騒ぐなということだ。いつもなら、もっと口汚くののしるのだが今日は紳士的な態度だ。別にここが面会室だから上品にふるま

っているわけではない。おおかた、丁に金でも摑まされているのだろう。
肩で大きく息をしながら、丁は伊沢をにらみつけていた。憎悪と殺意が黒い瞳の奥でちらちらと燃えているのがわかった。
沈黙が時間と空間を支配していた。急に空気が粘り気を持ち、ひどく重たくなったように思えた。部屋の温度が何度か下がったように感じられたが、それは三月の冷気のせいではなかった。
「捕まったのか？」
ようやく、伊沢が口を開いた。のどがやけに渇いて、ひからびたような声だった。
「……」
丁は沈黙したままだった。それが答えだ。捕まったのなら処刑はまぬがれない。
伊沢は天井をあおぎ、目を固くつむった。子猫を思わせる麗華の顔がまぶたの裏に浮かんでは消えた。熱っぽく民衆の困窮について語り、欧米と日本の草刈り場になり下がった現在の中国を嘆いていた。いつか日本へ行き革命の指導者、孫文に会いたいと語っていた。伊沢は麗華に日本の知り合いの住所を教えた。何かと面倒をみてくれるはずだ、と新橋の喜春姐さんを紹介した。東京からの麗華の手紙では喜春姐さんに世話になっていると書いてあった。麗華のことを知ったら、あの婆さんはどんなに悲しむだろう。
「日本人よ。おまえはこの国へ何をしに来た。東の野蛮な国の住人よ。たった一度の戦役でこの国に勝ったからといって、増長するな。おまえさえ、中国に来なければ麗華は……。日本人よ、私を見るんだ」
丁の目にどろどろとした感情が浮かんでいる。見つめられているだけで寿命が五年は縮みそうだ。
伊沢は深くため息をついて、丁を見た。丁よ、残念ながらおれはもう日本人ではない。六年前、二

十七歳のとき、北欧で日本人であることをやめてしまった。祖国などもうどこにもない。
「娘を亡くした、哀れな父親を見るがいい。私の顔をその罪深い眼に焼きつけろ。そして、おまえは死ぬときに私の顔を思い出すのだ」
「……」
「残念だよ。おまえがケチな詐欺事件で捕まったことが。たった三年でここからでられるそうだ。死刑にでもなってくれれば、私もここまで来る必要はなかったが……」丁は懐中時計を取り出し、時間を見た。
「もう、時間だ。行かなければならない。実はおまえに差し入れがある。あの看守から受けとってくれ」
丁は立ち上がって、伊沢に背を向けた。
ドアを開けて面会室を出て行こうとした丁が、首だけめぐらせて伊沢を見た。
「いいかね、死ぬときに私のことを思い出すんだ。忘れるんじゃない」
派手な音をたててドアが閉まった。
伊沢の肩を看守がたたいた。ふり向くと看守はにやにや笑いながら、伊沢の目の前に丸められた紙を差しだした。これが、丁の差し入れらしい。広げてみて、首をかしげた。絵が描かれていた。
龍(りゅう)の絵だった。
墨で描かれた龍がうねり、伊沢をにらみつけている。
見る者を威圧する、不吉な目をした龍だった。

二

囚人たちのからかいの声を無視して、伊沢は三十八号房へ戻った。石造りの無味乾燥としたその部屋は、三畳ほどの広さで定員が四名。今は伊沢の他に中国人の囚人がひとりいるだけだ。

「その顔を見ると女が会いにきたわけじゃなさそうだな」

伊沢がベッドに腰かけると、向かいのベッドに寝転がっていた関虎飛(グアンフーフェイ)が声をかけてきた。

一週間前に上海工部局刑務所にはいってきた男だ。どういうわけか、それまでいた男を追いだして伊沢と同室になっている。伊沢は日本人としては背が高い百七十センチだが、関はそれよりも首一つ分高い。寝るときにいつもベッドから足がはみ出る。年齢は伊沢よりも三つうえの三十六歳。あごと口に豊かな髯(ひげ)を生やしている。関という名前から、その筋肉質の巨体から、そして髯だらけの顔から、三国志の英雄、関羽を伊沢に連想させる。

「顔もみたくない奴(やつ)が、悲しいしらせを持ってやってきた。そして、わけのわからない絵をおれに残して帰っていった」

伊沢は欧米人のように肩をすくめて、龍の絵を関にわたした。寝転がりながら、関はその絵を見た。そして急にまじめな顔つきになった。困惑の表情で絵をじっと見つめていたが、いきなり起きあがりベッドのうえであぐらをかいた。

「そいつは、君を殺したいほど憎んでいるのか?」関が眉(まゆ)をひそめた。

「そうだ、憎んでいる。だが、どうしてそこまでわかる?」

「中国には赤眉(チーメイ)という結社がある。暗殺を生業(なりわい)としている連中だ。彼らは殺しの仕事を受けると、狙(ねら)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com